

「ことば」シリーズ8

和 語

漢 語

和 語

漢 語

漢 語

文化庁

「ことば」シリーズ 8

和 語 漢 語

昭和53年 6 月20日初版発行

定 価 250 円

昭和54年 8 月24日三刷発行

編 集

文 化 庁

発 行

大 蔵 省 印 刷 局

東京都港区虎ノ門二丁目2番4号

03 (582) 4411

落丁、乱丁はおとりかえます。

文化庁では、昭和四十七年六月の国語審議会からの建議「国語の教育の振興について」に示されている「国語が平明で、的確で、美しく、豊かであることを望み、この際、国民全体が国語に対する意識を高め、国語を大切にすることを養うことが極めて重要である」という趣旨に基づき、昭和四十八年度から「ことば」シリーズを作成し、これを各学校、各社会教育機関等に広く配布することにしていきます。

このシリーズでは、話し言葉、書き言葉を問わず、国民各層から広く関心の持たれている言葉に関する問題を取り上げ、その内容や言語生活における在り方について、専門家や学識経験者等により、分かりやすく解説などを加えていこうとするものであります。

本年度は「ことば」シリーズ8として、「和語 漢語」を作成しました。この本では、明治から現在にいたるまでの言語生活の中で和語、漢語はどのように意識され、使われてきているのか、またどのような問題点を有しているのかということなどを取り上げてみました。この本は企画委員会で構想を練り、内容や執筆分担について相談してまとめられたもので、次の二つの部分から成り立っています。

一 総論を兼ねて、和語、漢語に関する諸問題を話し合った座談会

二 問題になる点に関する解説六編

この「ことば」シリーズは、国民の言語生活について、あるべき標準を示そうとするものではなく、我々が我々自身の言葉について考えたり、話し合ったりするきっかけとなり、参考となることをねらいとしているものであります。そうして、そのことを通じて、広く国民の間に国語に対する認識が深まり、国語を大切にすることが高まってくることに役立つこととなれば、誠に幸いと存じます。

昭和五十三年三月

文化庁文化部国語課長

室 屋

企画、執筆等に御協力くださった方々

(五十音順、敬称略)

	氏名	現職
岩	淵悦太郎	前国立国語研究所長
菅	野謙	NHK総合放送文化研究所員
斎	藤修一	慶応義塾大学国際センター助教
瀬	戸仁	文部省初等中等教育局中学校教育課教科調査官
千	宗室	茶道文化振興財団理事長・茶道裏千家家元
竹	内美智子	共立女子短期大学教授
竹	西寛子	作家
飛	田良文	国立国語研究所言語変化研究部第二研究室長
水	谷静夫	東京女子大学教授
森	岡健二	上智大学教授

目次

前書き

座談会

和語漢語をめぐって……………5

岩淵悦太郎(司会)

斎藤修一、千宗室、竹西寛子

解説

一 明治期の漢語(森岡 健二)……………23

第一 漢語の流行

第二 詩文用語の衰退

第三 中国語訳の借用とその修正

第四 和製の訳語と漢語

むすび

二 日本人の心情表現と和語(竹内 美智子)……………37

——形容詞による心情表現——

第一 言葉による心情表現

第二 心情表現の担い手となる語彙と和語

第三 形容詞による心情表現

三 漢語の読みと同音語(飛田 良文)……………48

第一 漢語とは何か

第二 漢語の読み方の原則とその変化

第三 読み方の变化した漢語

第四 漢語と同音語の問題

四 放送と和語・漢語（菅野 謙）

はじめに

第一 初期の放送と和語・漢語

第二 動詞表現はなるべく和語で

第三 同音の漢語に注意する

第四 日本語の中に溶けこんでいる漢語

五 和語と漢語の造語力（水谷 静夫）

第一 造語・造語力ということ

第二 造語法の種類

第三 和語要素・漢語要素の造語範囲

第四 和語の造語の近況

六 学校教育における和語・漢語の取り扱い（瀬戸 仁）

はじめに

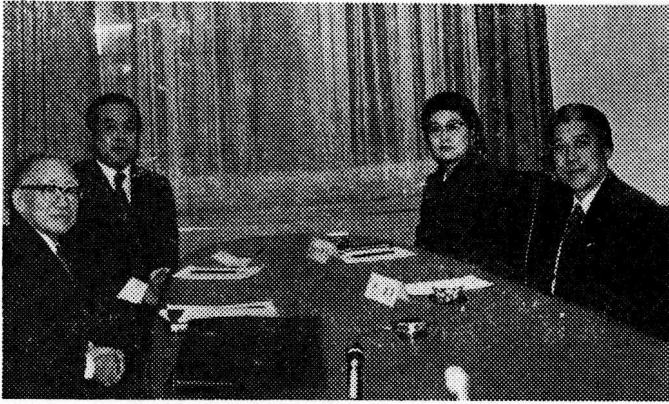
第一 語句・語彙の指導について

第二 和語・漢語の取り扱いの時期、指導のねらいについて

第三 教科書における和語・漢語の取り扱い

第四 和語・漢語の具体的な取り扱い——指導事例から——

第五 和語・漢語の取り扱いの課題



座談会

和語 漢語をめぐって

〈出席者〉

岩	淵	悦太郎	(司会)
斎	藤	修	一
千		宗	室
竹	西	寛	子

(五十音順)

はじめに

——和語・漢語・外来語——

岩淵 日本語の語彙はフランス語や英語などの外国語と比べても数は多いんじゃないかと思うんです。これは調査方法が違うので正確な比較はできないんですが、フランス語なんかでしたら、頻度数の高い五千語を覚えていけば九八%ぐらい賄え、あとの二%、辞書を引けばいいぐらいだと思います。もしその割合で日本語の場合を考えると、私の計算だと、二万二千語ぐらい知らないのだめだということになります。フランス語は大体限られた単語を重ね合わせて新しい概念を表すのに、日本語は、横並べにみんな並べてしまうという傾向があるのと、もう一つは日本語には漢語と和語（ともに「解説」六を参照。）と外来語と混種語



岩淵悦太郎氏

（和語と漢語の結合、和語と外来語の結合、漢語と外来語の結合のように、出自の異なった構成要素から成っている単語。）というような、いろいろと違ったものがあるものです。すから、数が多くなるんじゃないか。例えば、東京駅に八時に到着する、とも言えるし、八時に着く、とも言えますね。漢語でも和語でも表現できる。またこのごろの子供だと、「礼儀を知

らないな」なんていうより、「エチケットを知らないな」という方がよく分かるということで、外来語も使っている。極端な場合は、「落花生」と「南京豆」と「ピーナツ」と三つあって、意味が違うんじゃないかと冗談を言っているんですが……。（笑）そういうふうなかなりぜいたくな使い方をしているんじゃないか、一方から言えば大変豊かだけれども、一方から言えば余りにも整理不足という感じもするわけです。

これは恐らく時代的に言うと、明治以降新しく外国から入ってきたものを例えば「銀行」「会社」「資金」「予約」「出版」とかのように漢語訳してきたがそれを戦後は片仮名で表す傾向が強くなり、しかも、外来の異質のものを非常に多く取り入れた。それで語の数もぐっと増えたんだらうと思います。

ほかの言語でも、日本と同じような条件にあるところは語彙の数が多いんじゃないか。そんなところからいろいろお話に入っていただいたいと思います。

千 確かに日本人はヴォキャブラリーが非常に多い。私も外国へ度々行って、いつも感心して聞かれるのはそこなんです。外人は和語とか漢語というようなことは分らないんですが、日本人は外来語を従来 of 日本語に非常にうまく結びつけているということ……。

今、岩淵先生が、日本人が言葉をやまくつなぎ合わせて



千 宗室氏

使っているのは、明治以後いろいろな外来文化を取り入れた結果とおっしゃいましたが、確かにそうだと思いますね。例えば生活環境というものが言葉を大きく支配していく。外国人の生

活は単一的に決まった生活です。ところが日本人は、着物も着るし、洋服も着る。御飯も食べればパンも食べる。ベッドでゆかたを着て寝れば、布団でパジャマを着て寝ている。座る生活をしているかと思うと、いすの生活もする。食事にしても、本当にバラエティーに富んでいると思うんですね。日本式のもの、中国式のもの、それから俗に言う洋式のもの——。こういうような環境から、日本人の言葉が非常に異色的にミックスされてくる。私はミックス語と

いうことをよく言うんです。
竹西 普通、和漢混淆わんかんこうごうという言葉には慣れておりますけれども、和英、和仏あたりの混淆の語も、今、当たり前のように使われている。いつか日本に住んでいる外国人の座談会で「"スト貫徹"という言葉が使われているが、なぜああいうことが平気で言えるんだらうか。」と書いていますが、全くそうだと思います。

素人考えでは、和漢混淆には一つの言葉の体系としての共通性があるんじゃないかという気がするんですけど

ども「スト貫徹」の場合は全く違うものが何の抵抗もなしにつながっている。今、話に出ましたように、時と場所と言葉は、人間の体の違いと同じようにみんな微妙に絡んでおりますから、何か必然性はあるとは思いますが、やはりそういうふうに変えていくのも人間だけれども、食いとめるのも人間だという気がするんです。

千 このごろ、「カラオケ、カラオケ」と言いますね。カラオケって一体何でしょうね。空からのオーケストラだと言うんでしようか。非常に似ているような発音と言うか、イントネーションの置き方で実に器用に作り出してくる。お年寄りが聞いて「カラオケ」を「棺おけ」と思ったという笑えない話があるんです。(笑)

岩淵 「グリーン車」というのができたでしょう。あれは「緑車」というんじゃないや……。(笑)

斎藤 奇想天外な言葉を作りますね。「グリーン車」の例について言えば、国鉄は、PRのために一般の人たちに訴える言葉を使おうということで、一種の新しい感覚を「デイスカバー・ジャパン」以来打ち出しているけれども、言葉の方から言いますと、確かに新鮮な感覚はするもの、それだけに今までのものとは違う、行き過ぎていく感じがしないでもないですね。

岩淵 これは、和語にも、漢語にも、両方とも通用することかもしれないけれども、国鉄は、みんなが使う言葉



修一氏 齋藤

としても、術語を決めようとするんですね。ある時、寝台車に乗っていて東京に近くなったら、「今日は寝台を解体いたしません。」と言われて何のことかと思いましたが。これは片付けられないことなんですね。「解体」と言わなくても、「片付けられない」といいと思うんですが……。自動車の解体じゃないのに。(笑) それから、「余席がありません。」という場合の「余席」とか「一席」「二席」とかという言い方をしていますね。ある駅で切符を買おうとしたら、「京都まで一席ですか。」と言う。聞かれた方は何のことか分からない。まごまごしていたら「お一人ですか。」と聞き直してきた。初めから「お一人ですか。」と言えば、それで通じるのに、「一席」なんていう言葉を使うからコミニケーションが悪いわけですね。そういう専門語を国鉄は随分独断的に使っていると思う。

齋藤 職業語というか、そういう言葉を一般の人に対して使う時には、ちよつと注意してくれればいいんですが、注意しない例がたくさんありますね。喫茶店なんかにしても、最初は「コーヒー」と言っていたのが、「ホットコーヒー」になって、今度は「ホット」になり、「ホット一つ」なんていうことを客の方で言い出すというふうなことがありますね。

干 先ほど落花生の話が出ましたが、今東光先生が生前あるレストランでつまみを注文する時に、「南京豆を頼むよ。」と言ったら、「南京豆はございません。ピーナッツならあります。」という返事であった。どう違うのか聞いたら「皮がついたのと皮が取れているのとは違うんです。」と言ったそうです。

牛乳とミルクもそうですね。どう違うのかというと、ミルクはあつたかくして砂糖を入れて持ってくるもの、牛乳は冷たいままびんど持ってくるものらしいですね。

岩淵 レストランに行くのと、御飯でなくて「ライスですか。」と聞かれるのと同じですね。

齋藤 必ず言い直しますね。自分のカテゴリーに入れるんでしょね、きっと。

岩淵 ナイフなんかも「ただいまセットします。」と言う。何だか外来語の座談会みたいになっちゃって具合が悪い。(笑)

齋藤 歴史的に見て、日本人というのは外来文化を摂取することに慣れていて、古くは中国大陸から来たものを使っていた。そして物と一緒に言葉が入って来た。また明治になって西洋のものが入ってくるというふうなことで、つまり新しいものはいいいものだという気持ちはどこかにあって、それを常に追い求める。そしてまたそれを使うことによって、売ろうという商業主義に結びついているんですね。

岩淵 好奇心があること、ひけらかすこと、売り物にすること、いろんな心理があつて使われるんですね。

竹西さん、『源氏物語』なんかだったら、漢語もあるけれども、非常に限られますね。

竹西 これは遅く気がついたんで恥ずかしい話ですけども、日本語の中の抽象語とか観念語は、大体欧米の外国文学が入ってきた明治以降になってからで、それまでは欠けているということがよく言われていますけれども、例えば、『世界』という言葉はちゃんと『源氏物語』の中にも『蜻蛉日記』の中にも出ています。そしてそういう時の「世界」は、まさに地図の世界とも違うわけで、それは特定の場所を指す「世界」もありますけれども、もっと抽象的な意味で使われている。ただそれが非常に少ないと思いますね。『源氏物語』のああいう軟らかい一種の雅文が生きているというのは、その中にゴマ塩みたいに硬い言葉が時々入っているからで、あれが和文だけですと、かえって特徴も消される面があるのではないかという気がするんです。



竹西 寛子氏

それから、『源氏物語』の中でも大切なところにしょっち

ゆう『史記』が引用されていますね。例えば、光源氏が謀反心を持つてるんじゃないかと疑われるところで、「白虹日を貫けり、太子懼ぢたり。」という言葉（『史記八鄒陽伝』）がそのまま引用されている。（賢木の巻）これはそれが分かっていない人でないかという理解できないわけですね。つまり、「世界」という言葉を一つの和文脈の中にかし込むのと、独立して一つの漢文化がそのまま引用されてくるという形とがある。そしてだんだんこれが中世に向かうに従ってミックスされていくんじゃないか。そのまま生かされる場合はかなり高度なもので、共通の地盤の読者がある程度想像しないととても分からないと思いますね。ですから今残されているものは選ばれた人たちのものなので、それでその時代一般が想像できないというのは大変不安だし残念ですけれども、仕方のないことかもしれませんね。

岩淵 私は『源氏物語』は朗読されて、耳で受け取ったと思うんです。朗読を聞くのは民衆じゃなくてサロンですから、同じような教養を持っている者が聞くわけですね。ですからそういう人に分かればいいし、またそういう人が、場合によっては、こういう方がいいたっていうので、手を入れて変えてしまうことがあったのではなからうかと思つていますが……。それからある程度まで仏教思想が広まっていますね。「世界」なんかも仏語じゃないんでしょうか。ある程度抽象的な概念なんか仏語にはありま

すから、それを持ってくるというところはございますね。

竹西 今の例だけで申しますと、「グリーン車」の場合と、「白虹日を買けり」の使い方とは同一ではないと思うんですね。一つの言葉の意味と価値とを認めて使った方がいいという意識があつて使う場合と、もつと慣れ合いというか、悪く言うとも横着な生活態度で、言いやすくさつと使うというような場合とは違つたろうと思つています。殊に戦後の小説に限つて言えば、それまでの遺産を非常にせいたくに取り入れて、後ろにそういう何重にも知識のびようぶが立っているものは一体どうなつたのかなという気がする。それがいいんだとは決して言えないんですが。

この例が適切かどうか分かりませんが、三島由紀夫さんのある種類の作品にはそれが感じられますが、全くそうではないような作品も出てきている。言葉は、どういふふうに変つていつても、突然生まれるものではないし、どんなにいやだと思つても、今使つている言葉の背後には万葉仮名以来のものがあるわけですから、その辺をちよつと都合が悪いのであつちへやるというのは、いい悪いじゃなくて、事実を殺すことだと思つて、言葉の場合も優劣じゃなくて、日本語及び日本人の事実ともつと結びつけて考えたらいいんじゃないかなと思つています。

岩淵 言葉だけの問題じゃありませんからね。

千 先ほど仏語のことが出ましたが、神祭りの言葉、神

道の言葉は、『源氏物語』の中に出てくる言葉との関連性が非常に強いように感ずるんですが、どうでしょうか。

岩淵 おまね 大根はそうでしょうか。大和言葉で……。祝詞なんかだと形式的になつていふでしようが、『万葉集』の言葉ですね。ただ、『源氏物語』の場合にはそれだけではなくて時に漢語がちりばめてあるということでしょうか。

竹西 「須磨」の巻のところ雷が落ちて大騒ぎになり、海神の心を静めようという場面の文章なんか、今おつしやつたようなことですね。あのあたりは、祝詞というよりも、本地垂迹ちよやくでしょうか。

千 『源氏物語』は詳しくないんですけども、そういう影響の方が強いんじゃないかという感じがしますね。

竹西 仏語の影響というののもつと後になつてくるんじゃないか。ただ特定の人たちは、写経はしていますし、経典を読んでいますから、それは入つてきて自然だと思つていますが。大ざつぱな言い方をすると、気分としての仏教というのは相当早く浸透していると思つてはくれど、思想というか、一つの哲学の体系としてのものはずっと後だという気がするんです。『新古今集』の中に釈教歌が初めて出てきて、ああいうところで一つの形式が言葉を保障していくというか……。

岩淵 『梁塵秘抄』あたりだとそうですね。ただ、ムード的には、『枕草子』の中に説教する坊さんはハンサムな

顔つきであると書いてありますけど。(笑)あの当時の和語というのは、目で見るというよりも説教だとか何かを通して入ってきているんだと思うんです。だから感覺的に入ってきてるんじゃないかと思うんです、あの当時の仏教關係のことは。

齋藤 いま、先生がおっしゃったように、お寺へ行ってお説教を何遍も聞き、だんだんに知識が入ってくる。それは必ず耳から聞いて、また人に口で伝えていくという過程を経ていきますから、こなれた言葉であるわけですね。それとともに、当時は現代風に言えば情報源が非常に少なかつたと思うんです。ですからお互いに知っているというのは共通であつて、恐らく今のように、こちらの専門の人はほかのことは全然知らないということではなくて、共通の古典のようなものがあり、読書人であれば必ずこれとこれは読んでいる、例えば中国のいろいろな古典なんかにも一通りは目を通して、ということがあつたわけですね。

先ほどの竹西先生のお話のように、戦後、断絶があるということは、結局古典が増え過ぎたというんですか、あるいは伝統とつながつたものでなくて、新しい翻訳された文学、その他のものが若い人たちの古典になつたというか、例えば高校生の愛読書を見ると、かなり上位の方に外国の翻訳文学が入っているということがあるわけで、やはりそこには断絶が起る十分な理由があると思います。

岩淵 大ざっぱで大胆な言い方をすると、奈良時代は本当に大和言葉で表現されていたような気がする。平安時代ももちろんある一部のものはそのいう系列だと思つてすが、一方には漢文訓読が出てくる。その影響を、殊に男性が受けている。だからあの当時の漢文訓読というのは一種の翻訳文だと思つてですね。そういう影響を受けて、『今昔物語』とか『平家物語』とか、そういう翻訳文的なものが出てきた。漢文の翻訳文的な流れがあつて、それから抜け出そうとしても抜け出せなくて、明治になつた。明治になつたら、今度はその上にヨーロッパの文物が入つてきて、ヨーロッパ直訳のものが入つてき、教室英語が入つてきて、そういう影響を受けて、日本語はどうも常に翻訳翻訳できていような気がする。三島由紀夫なんか読んでみても、確かに翻訳調ですね。

竹西 三島さんは男性の文学ということを力説しているわけですね。ところがこれは私の読みなんですけれども、三島さんの文章で後に残るものは、女文の要素のある男性的な文章だと思つてます。それがおもしろいと思います。

言葉の奥行き

千 話は少しとびますが、今は、非常に広い範囲には読めるが、しかし言葉自体は固定化しているというか、変化というものがそこに見当たらない。本来、一つの言葉でも

使い方によっては変化というものが出てくるんですけれども。例えばお化け屋敷というのが、昔、夏に必ずありましたね。お化け屋敷といっても、中にいる人は本当のお化けじゃなくて、人間がお化けになって出てくる。考えたらちっとも怖くはないわけです。しかし何かあの中に入っていると怖い。それは単なる娯楽といってしまうえば娯楽かもしれませんが、ああいうようなものの中にも、日本人の生活と結びついていく言葉の感覚というものがあつたような気がする。今は、お化け屋敷のようなものは全く形が変わってきてしまつて、アミューズメントセンターということになって、機械化された合理的なシステムとか、雰囲気の中に観客が置かれてしまうから、言葉自体の使い方ようも非常に変化がなくなつてきている。だから自分たちが読んでもつながつていかないという断絶があるんじゃないか。ちよつと極端な言い方かもしれませんが、そういうふうに感ずるんですね。

竹西 今のお化け屋敷の話はとても象徴的なお話だと思いますね。言葉が、分かるものだといい前提に立つて使われるのと、分かり切らないものだといい前提で使うのと随分違うと思うんですね。言葉には意味と符号と両方あるわけですから、分からなくても使わなきゃいけないし、分からないからこそ使わなきゃいけないという一面があるとは思いますが、今、一つの言葉でもいろんな変化がある

とおっしゃつた、そのことを私は一番王朝文学に教つたような気がします。そこにはたくさんいろいろな感情表現の言葉があつて、豊富なように言われますけれども、今一番強く思うのは、「あはれ」なら「あはれ」というたつた一つの言葉を、前後の文章が変えていくということです。

岩淵 語彙数はそんなに多くはないんですね。

竹西 もうそれはみごとに使い方だと思つてです。そこにどうしても、「あはれ」という語が置かれるんだと納得させられるような使い方……これは谷崎潤一郎さんがおっしゃっていることだけでも、語彙の数が多いというのは、名文の条件じゃない。更にその線に乗つて自分流に言わせていただくと、語数が多くても物事が正確に言えるとは限らないし、よく言えるとも限らない。

伝統文化と和語、漢語

岩淵 千さんの方は伝統的なものに御関係が深いわけですが、そういうものと漢語との関係はどうですか。和語は非常によく使われているし、なじみややすい世界だと思つていただけます……。

千 お茶というのは、まず「茶(さ)」という言葉で仏教と一緒に入つてきた。仏教、特に禅宗の方ではお茶を飲むのを茶礼と申しますね。ただしそれが民間の人たちのところへ移つてきますと、茶ちやの湯になる。茶ちやの湯とは言いま

せん。それが利休の時代に「道」になってくると、茶道というようになってくる。

そして、鎌倉時代に書かれた栄西禅師の一つの論文のよ
うなものに、『喫茶養生記』というのがあります。その中
にも、また利休の『南坊録』の中にもそれぞれ思想、哲学
というものが、皆同じであるけれども、入っている。お茶
をただ差し上げる、いただくということだけですけれど
も、その中に宗教的実践というものが随分ある。

時に「わび」「さび」というのは代表的な和語の形だと思
うんですが、外国へ行って講義する場合にも、「わび」「さ
び」とそのままに私ども申します。結局「わび」「さ
び」という言葉で表される一つの姿、その中には風流があ
り、その風流の以前の姿というのは平安文学の中に出てく
る「もののあはれ」というか、それは風景の中にも環境の
中にも存在する。そういうものが結局「わびぶる」という
言葉につながってくる。利休の師匠の紹鷗が『わびの文』
で、わびとは「正直にしてつづまやかでおごらぬさま」と
定義をつけている。利休はそれを「わび」「さび」と一緒
にして、漢語で「和敬清寂」という一つの精神表現をして
いるわけです。ですから、茶というものの自体が、その中に
芸術性と宗教性と道徳性と哲学性を持っている。しかも
その宗教性には仏教、特に禅宗を背景として天文十八年（一
五四九）にフランシスコ・ザビエルが日本にキリシタンを

持ってくるが、そのキリシタンの一つの思想をその中に加
えている。そして茶の道というものが大成された。

岩淵 キリスト教との関係というのはおもしろい。

千 ところで、ジョン・ロドリゲス（イエズス会宣教師
で語学者。ポルトガルに生まれた。天正五年（一五七七）
来日）という人がバテレンと一緒に来日し、利休の弟子に
なって、日本人の生活文化というものを書いた時に「茶
道」を取り上げている。その中にそのまま「茶」と表現さ
れている。ですからそのまま「お茶」によって日本の生活
というものが表されているとも言える。

岩淵 「茶」は向こうへ入った時には中国語でなくて日
本語で……。

斎藤 そうなんです。「茶」が「シャ」「ティー」に
なっていくって、外国で「ティーセレモニー」と言われます
けれども、結局は「茶道」、「茶の湯」はそのままするとい
う時代になってしまったわけです。

岩淵 日本人というのは、いろんなものを取り入れて大
成していくというか、一つの独特のものを作り上げていく
才能を持っているわけですな。

千 今の「和敬」とか、「わびぶる」という気持ちを極
端に表すためには、「いかがでございますか」とか、「お
先へ」とか、「いただきます」とか、すべて感謝というも
のを標準に置いた一つの作法、動作というものの現れがあ

って、それは直感（日本人しか持っていない目で見て動作で体得していくこと）から言葉の意味を上手に使いこなすということを目的としている。茶道の礼儀や作法と言うと窮屈に考えられてしまえますけれども、英国なんかのああいう伝統的な生活体系を見ますと、窮屈な中に自然に言葉とかエチケットを教えていつている。厳しさというものがなければ、言葉も人間性も生活に立ち向かう知恵も出てこないんじゃないかと私は思うんです。それはしつけと言葉ということにもなってくるわけですが、そうすると、非常に幅が広がってきますね。

岩淵 我々も先生の門人になってやり直さないとだめだと思えますけれども、外国人には「わび」とか「さび」とか、なかなか理解できないでしょうね。

千 外国の人たちに「わび」「さび」という言葉を説明する時に、「正直にしてつづまやかでお（らぬさま）」ということと、「imperfect beauty（不完全な美）」というところから始めますと、非常によく理解してくれますね。「幽玄」が「ユーンゲニズム」という言葉で、そのまま向こうに入りました。今、「わび」という言葉も随分向こうでそのまま使われていますね。ただ「わび」よりも「さび」の方が難しい。

「花をのみ待つらむ人に山里の雪間の草の春を見せばや」（藤原家隆の歌 『壬二集』所収。）というのが「わび」であり、「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のほとま屋の秋

の夕ぐれ」（藤原定家の歌 『新古今集』所収。）というのが「さび」である。利休は代表的なこととしてこの二つを挙げているんです。花も紅葉もない秋の夕ぐれが「さび」であり、春になって咲き出そうとするために、雪の中で自由に力を備えている草、それが「わび」であると。大変象的で難しい話ですけれども。

竹西 「花守や白き頭をつき合せ」（向井去來の句 『去來発句集』所収。）、あれから逆行していくと……。難しいですね。

外国人に対する日本語教育では

斎藤 生活体験、あるいは生活環境と結びつかないと分からない。特に日本的な美の中心になるような、「わび」「さび」といったようなものは、やはり日本的な状況に置かないと分かりませんから、日本を研究する人はこちらに来てやってもらわなければならぬ。私どもが説明するといいますが、ごくありきたりの説明であって、本当に分かったといつてひざをたたくようなのはとても教育の範囲ではできないと思います。

そして、日本文化の魅力は大変なものです。特に文化の古いところ、ヨーロッパで言いますと、フランスの学生なんかそういうものに非常に引かれるようです。

千 南方や、東南アジアの国々の学生はどうですか。

齋藤 日本に來る人たちが必ずしもそういう精神文化を勉強しようと思ってくるわけではなくて、むしろ、明治の日本人がヨーロッパへ行つてせつせと実用的なものを求めたのと同じような感じがありますね。日本文化を学ぶということになる、どうしてもヨーロッパ、アメリカの学生たちが多い。

岩淵 話は違ふんですけれども、齋藤さんに伺いたいんですが、外国人が学習するのに、漢語と和語では何か違いがありますか。漢語とか和語というものを何か意識しているのか、それとも同じ日本語だからというので別にそういう意識はないんでしょうか。

齋藤 こちらでこれは和語である、こういうふうな動詞にもとがあつて、例えば、「わび」とか「さび」にしても動詞の名詞形であるというふうな説明をすると、ああそうかという受け取り方をしますから、そういう意味で和語が非常に味わいの深いものだ、広がりのあるものだということを感じを持つようです。それに対して漢語の方は非常に定義的なある概念をはつきり表すということから、比較的我々と同じような感覚で分かっているようです。

岩淵 とところで、齋藤先生にお作りいただいた資料ですが、これは……。

齋藤 大変おもしろいものを最近発見したものですから。私が見たのは、「日本語から見た英語」という題で、

お茶の水女子大学の長谷川潔先生の書かれたものなんです、これは、ほかの方が調査なさったものを再び採録したということで、引用していらつしやるわけです。この資料はウエブスターの第三巻に載つた日本語の表なんです。

岩淵 これが全部ウエブスターに載つてゐるんですか。

齋藤 ええ。先ほどから外来語ということが出ましたけれども、私は日本語を輸出する方を専門にしているので、輸出したものがどのくらいあるかというそのカタログです。これで果たして日本像が描けるか。(笑) 実にいろんな形になつてゐるんでびっくりしたわけですが、我々の方に入つてゐる外来語というのも同じような形になつてゐるわけです。

竹西 かなり特殊なものが入つてゐますね。例えば、「B」の項で、biva(琵琶)、bonsai(盆栽)、bonze(坊主)、bushido(武士道)など……。

干 「kamikaze(神風特攻隊)」も入つてますね。

方言の和語、漢語

岩淵 「梅雨(つゆ)」ではなくて「bai-u(梅雨)」で入つてゐるんですね。梅雨(ばいう)ではおもしろいことがあるんですよ。「入梅」というのは梅雨に入ることですが、「出梅」という言葉も漢語にはあるんですよ。ところが私の生まれた東北では、「入梅」は梅雨に入ることではなく、梅